様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　９ 月　５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１０３４６

研究課題名（和文）統合失調症者と高機能自閉スペクトラム症者における日常生活上の困難さ

研究課題名（英文）Difficulties in daily life in people with schizophrenia and people with high-functioning autism spectrum disorders

研究代表者
山田　純栄（Sumie, Yamada）

京都大学・医学研究科・客員研究員

研究者番号：７０４５４４１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：日常生活上の困難さは社会適応の程度に反映されていると想定し、Autistic Traitsの視点から、健常者、統合失調症者および高機能ASD者を対象に、社会認知と対処行動の関係を調べた。健常者調査から、Autistic Traitsスコアが高くとも社会適応の程度が良好な者は、原因帰属において敵意を選択しなかった。精神科リハビリテーション利用者調査から、統合失調症者は高機能ASD者と比べて、原因帰属において敵意を選択しなかった。Autistic Traitsスコアが高い統合失調症者は、対処行動においてアサーションを選択しない傾向があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題の核心的な問いは、ASD特性（Autistic Traits）の視点と日常生活上での困難さの関係を解明する一助を得ることであった。高いASD特性がありつつも良好な社会適応を得ている健常者は出来事の受け取り方に特徴があった。特に、精神科リハビリテーション利用者においては、アサーション技能が社会適応の程度に大きな影響を与えている可能性があることが分かった。出来事の受け取り方を含め、ASD特性が高い者におけるアサーション技能を構築できれば、日常生活上での困難さを軽減できると予想する。医療だけでなく学校、地域、行政においても前記の技能構築は活用できるだろうと考えている。

研究成果の概要（英文）：Assuming that the difficulty in daily life is reflected in the degree of social adaptation, the following survey was conducted. From the perspective of Autistic Traits, we investigated the relationship between social cognition and coping behavior in healthy individuals, autistic individuals, and high-functioning ASD individuals.
From the survey of healthy subjects, those with a high Autistic Traits score but a good degree of social adaptation did not select hostility in causal attribution.From a psychiatric rehabilitation user survey, schizophrenic individuals did not choose hostility in causality compared to those with high-functioning ASD. Schizophrenic individuals with high Autistic Traits scores tended not to choose assertiveness in coping behavior.

研究分野：リハビリテーション

キーワード：精神科リハビリテーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

統合失調症と知的機能の障害がない自閉スペクトラム症（ASD）では、日常生活上の困難さの現れ方、および支援法にも類似点が確認できる。しかし、日常生活上の困難さの現れ方が似ていても、それが生じる機序が異なる点を踏まえずにそれらの課題に向き合うと、本人も支援者も混乱することがしばしばである。そして、ときにそれらの合併症となれば、回復段階ともあいまってその臨床像はより複雑さを呈し、医療従事者は支援方法を選択する際に逡巡する。

そこで、本研究では、精神科リハビリテーションにおける ASD 傾向を有する対象者への支援方法構築を目指し、疾患の別なく診断閾下の定型発達者にも存在し、二次的な精神症状の発症に繋がる社会適応の問題の原因となる“Autistic Traits 傾向”という視点を持った関わりや対応の必要性に注目した。診断名は支援における重要な指針となり回復の道筋を照らす道標である。対象者の日常生活上での困難さに Autistic Traits 傾向が影響を与えている場合は、診断名に加えて前記の視点を用いることの重要性を提案したい。

ASD の診断がある、もしくは合併症として ASD が確認されていなくとも他の診断名があり、かつ Autistic Traits 傾向が強い特徴をもつ対象者への支援方法が必要であという指摘は、臨床を担う医療従事者ならば経験値として有している。精神科リハビリテーションは統合失調症を中心に発展した歴史的な経緯があるため、一義的に伝統的な支援方法を採用してしまうことがしばしばであると感じている医療従事者は多い。そして、彼らは回復段階や、日常生活上での困難さの表現型が主に統合失調症に帰属するのか、Autistic Traits 傾向なのかにより、適切な対応が異なるという点も同意している。本研究によって、そのような指摘の一部を解明する一助となり、精神科訪問看護や精神科デイケアにて、疾患特異性に則した支援を根拠に基づいて行うことが可能になると考えた。

２．研究の目的

“日常生活上の困難さ”は社会適応の程度に反映されていると想定し、Autistic Traits の視点から、統合失調症者と高機能 ASD 者の神経認知機能と社会認知機能の両側面からそれぞれの関係性を調査することであった。

３．研究の方法

質問紙調査を実施した。

４．研究成果

（１）予備調査（健常者、かつ知的機能の障害はない者）

Autistic Traits 傾向が高い者は、対人場面の状況を解釈した後に、相手に自分自身の考えや思いを伝えるといったプランを選択する傾向、また生じている出来事を良い方向に持っていき、解決に繋げたいといったプランを選択する傾向が低いこと、加えて相手に何も言えずに漠然と話を聞き続けてしまうといった傾向が高いことが示唆された。

高い Autistic Traits 傾向を有する健常者において、社会抵抗の程度が不良群は、良好群と比べてると解釈ステップの下位因子の「敵意帰属（$p<0.05$）」の得点が有意に高かった。

＊健常者を対象にした調査結果は、教育領域のジャーナルに投稿をしている途中である。

（２）本調査（精神科リハビリテーションを利用している統合失調者、ASD 者）

統合失調症かつ高 Autistic Traits 群は ASD 群と－この２群間は同程度の Autistic Traits、社会適応の程度に有意差はない－比べて、解釈ステップの下位因子「敵意帰属（$p<0.05$）」が有意に低かった。

統合失調症において、Autistic Traits の高低の視点から、社会的情報処理尺度については、高 HF-ASD 群は低 HF-ASD 群と比べて、解釈ステップの下位因子「偶然帰属（$p<0.01$）」、目標ステップの下位因子「主張性目標（$p<0.05$）」、行動実行ステップの下位因子「アサーション（$p<0.05$）」において、高 HF-ASD 群の得点が有意に低かった。

精神科リハビリテーションにおける Autistic Traits 傾向を有する利用者への支援方法構築に向けて，Autistic Traits 傾向という視点をもった関わりや対応の必要性を明らかにするとともに、精神障害領域の臨床現場でのより適切かつ効率的な対応へと繋げるための一つの判断材料を作成すること目的とした。本研究を通じて、精神科リハビリテーションの対象層の変遷や複雑化に伴い、ASD の診断の有無ばかりに注目するのではなく、幅広い対象者—学生、生徒、地域住民－に対し ASD 傾向という視点を持った関わりや対応の必要性を認識する上で、彼らの特性の一部を明示できた。

＊精神科リハビリテーション利用者を対象にした結果は支援領域のジャーナルに投稿途中である。

精神科リハビリテーションでは、日常生活上での困難さの軽減、就学や就労などの自己実現の達成のために、対象者の行動の予測とその制御の獲得を促す。その治療アプローチや支援においては、時間と場、そして行為を共有する必要があり、言葉だけでなく作業活動やプログラムも使用する。行為を通して、対象者の日常生活上での困難さを把握することは、チーム医療のなかで精神科リハビリテーションが担う重要な役割のひとつである。

精神科リハビリテーションを利用する自閉スペクトラム症者の多くは、自分自身が暗黙の前提としている認知・行動パターンと大多数の者のそれとが違うことに気づいていない、もしくは自分の認知・行動パターンは劣っているなどの自己効力感の低下を伴う理解をする。そして，過去の対人交流において、円滑な意思疎通ができないことから誤解を受け、彼ら自身も環境からのフィードバックを誤訳してしまうため、しばしば合理的ではない対処行動技能を獲得していることにも気づきにくい。彼らの日常生活上での困難さの背景にあるこのような複雑な仕組みは、言葉と行為の両方で理解する必要があり、精神科リハビリテーションでは作業活動やプログラムを活用することになる。

本研究の成果と上記のリハビリテーションの役割を踏まえると、2 つの成果に言及することができる。一つ目は、疾患の別なく診断閾下の定型発達者にも Autistic Traits が存在しているとの前提を踏まえ、未診断の健常者群にもリハビリテーションの技能を活用できる可能性が得られたことである。健常者調査によって、Autistic Traits が高く―ASD 鑑別診断においてより詳しい検査を受けることが推奨される程度に高く―ても社会適応の程度が高い者たちが確認でき、彼らは物事の受け取り方が、社会適応の程度の低い者と明らかに異なっていた。もし、大学生や社会人にて Autistic Traits が高いと推測される対象者に出会った場合、問題解決の最初の工程で、彼らは敵意帰属に偏りがちであるという視点を持てば、多くの場合誤解であると説明することができるだろう。彼らは敵意帰属に偏ってしまうような経験に焦点を当ててしまうならば、良い経験を促すことで問題解決の最初の工程を修正することができるだろう。2 つ目は精神科リハビリテーション利用者を対象にした調査から、日常生活上での困難さが類似する統合失調症と ASD では、問題解決の初工程に違いがあること、統合失調症者でありかつ Autistic Traits の高低により、問題解決の初工程だけでなく、問題解決における目標の立て方とその方途が異なることである。特に注目すべきは、統合失調症者でかつ高い Autistic Traits を持つものは、困難事象に出会った際に、アサーションができない点である。つまり、知的機能の障害がない対象者でかつ Autistic Traits があれば、精神科リハビリテーション対象者においては一般的に言語操作性が高いと推測されるが、彼らは困難事象を適切に述べることができないと感じている傾向があった。言語操作性が高いからこそ、対象者の述べたいことを伝えられているかという程度に差が生じるのかもしれない。しかし、本研究の成果をもとに、Autistic Traits を持つ者のアサーションでは、ことばを伝える道具と他者と共感し共有するという２つの側面から解明できる可能性を得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 飛田 彩也香，山田 純栄，仙田 裕樹，品川 祐貴，雲井 春香	４．巻 3
２．論文標題 高機能自閉スペクトラム症の特性を有する精神科リハビリテーション利用者への対応の検討　作業療法士へのグループインタビュー調査から	５．発行年 2018年
３．雑誌名 京都府作業療法士会学術誌	６．最初と最後の頁 22　31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関